

岩木山「お山参詣」の地域社会形成機能に関する研究 —お山参詣参加者の意識を中心に—

吉田 智美 丸山 富雄

キーワード：お山参詣，祭り，地域社会形成，岩木町

A study on the function of community formation in “Oyama sankei” at the Mt.Iwaki —Focused on participants’ intentions towards Oyama sankei—

Tomomi Yoshida Tomio Maruyama

Abstract

The purpose of this study was to clarify the function of community formation in “Oyama sankei: the festival in Aomori” at the Mt. Iwaki. We conducted a study by using an interview method to the staff members of Iwaki town and Iwaki (Senior) high school. We also asked to fill out a questionnaire for adults (137) and high school (130) participants of the festival.

The results were summarized as followed,

- 1) According to the staff members of the town, it became clear that "Oyama sankei" had social and cultural effects for their community. However, problems such as existence of the non-interested residents or lack of successors were indicated.
- 2) According to the result of the research on festival participants, we found that satisfaction of the participants were high. However there is a need for activities like public relation for the people in and out of the town or attractive mechanism to increase repeaters for this festival.
- 3) The staff members of the school were expecting various educational effects for the festival.
- 4) Compared to 10th graders, 11th or 12th graders who were repeaters of the festival had good opinion about “Oyama sankei”

There are still some problems, but "Oyama sankei" has the function of community formation on the aspect of social and cultural effects.

Key wards : Oyama sankei, festival, community formation, Iwaki Town

I. はじめに

「まちづくり」という言葉が全国で注目を集めている。自然の豊かさや歴史，風土など地域の個性を生かした施策や実践例はまちによって様々である。

今日，日本各地で，セールスイベント，文化イベント，スポーツイベント，博覧会といった様々なイベントが催さ

れ，イベントの開催によって，多くの効果が期待されている。同様に，祭りにも多くの効果が期待されているといえる。

本研究が対象とする岩木山「お山参詣」も，起源は確かではないが，西暦 780 年に岩木山神社創建以来 1200 有余年という永きにわたり行われている伝統的な祭り

ある。

太宰治（1951）は小説「津軽」のなかで、お山参詣の様子を「津軽の連峰岩木山の山頂奥宮に於けるお祭りに参詣する人、数万、参詣の行き帰り躍りながらこのまちを通過し、まちは殷賑を極める」と紹介するほど、昔から津軽の人々の心を熱くする祭りである。

「サイギサイギ」の掛け声とお囃子の中、御幣を持った行列が何団体も続く。さらに3日3晩お囃子が神社境内から絶えることはなく、津軽の人々の本質がそこにはみられるといえる。地域の活性化を考えたときに、お山参詣を地域のバロメーターのようなものと考え、このような伝統的な祭りを、地元の町や関係者はどのように捉え、また祭りはどのような機能や役割を担っているのか、さらにはその今日の課題は何なのか³⁾、本研究の動機となっている。

II. 研究目的

本研究では、岩木山「お山参詣」を事例にし、この祭りが地域活性化にどの程度貢献しているのか、どのような効果が生まれるのかを明らかにし、伝統的な祭りが果たす地域社会形成機能を考察する。調査は、岩木山「お山参詣」に参加し、参与観察とともに参加者にインタビューを行い、参加者の意識と実態を分析する。また一般の参加者及び祭りに参加した地元高校生にアンケートを行い、祭りに対しての町・主催者や学校側の考え方と比較を行い、理念や目標と実態との違いや乖離等についても考察する。

岩木山「お山参詣」の事例を用いた本研究結果は、スポーツを含めたイベントの機能と役割を明らかにすることに寄与しようと考えている。

III. 研究方法

1) 町・主催者への聞き取り調査

調査対象：岩木町観光商工課・岩木山神社
 調査時期：平成17年5月23日～24日
 平成17年11月11日～12日
 調査内容：祭りの内容・構造、参加者の形態、祭りにおける効果、町民の関心度

2) 参加者への面接調査（お山参詣時）

調査時期：平成17年9月2日～4日
 調査方法：個別面接調査法
 回収数（率）：137件（100%）
 調査内容：対象者の属性、参加動機、満足度、次回への参加希望

3) 岩木高等学校生徒への質問紙による調査

調査時期：平成17年10月下旬
 調査方法：集合調査法
 回収数（率）：130件（100%）
 調査内容：満足度、次回への参加希望

4) 学校関係者への聞き取り調査

調査時期：平成17年11月11日
 調査内容：参加理由、参加の形態、参加による教育効果や生徒の様子、現在の問題点や今後の課題

IV. 研究結果

1. 「お山参詣」の概要

1) 「お山参詣」の歴史と変容

お山参詣の歴史について、関係者へのインタビューの内容とともに『弘前の文化財（お山参詣）』（1982）、『岩木山信仰史』（2000）、『週刊神社紀行岩木山神社』（2003）等を参考にその変容を含め概観する。

旧暦7月29日から旧暦8月1日に到る3日間、お山の恵みに感謝を捧げ、五穀豊稔の祈りをこめて県内外から大勢の参詣人で溢れる。津軽の秋の最大祭典である「お山参詣」が催される。

祭りの流れとして、津軽近郷近在から行列を組み、高さ数メートルにのぼる幟や御幣を掲げて、「さいぎさいぎ（懺悔懺悔）どっこいさいぎ（六根懺悔）おやまさはつだい（御山八大）こんごうどうしゃ（金剛道者）いちになのはい（一々礼拝）なむきんみょうちょうらい（南無帰命頂礼）」と登山囃子を賑やかに響かせながら岩木山神社へ詣でる。供物を捧げ、お払いを受け、夜中に岩木山に向けて出発し、夜明けの登頂を目指す。ご来光を拝んで、「いい山かげだ 朔日山かげだ バダラ、バダラ、バダラヨ」と囃子詞を唱え下山し、集落に戻ってハバキヌギとよばれる儀式で安着を祝う。

岩木山登拝は、明治5年に「女人禁制」が解かれたことで、様相は変わった。戦後には、女性が参詣に参加するようになり、次々と女性が山頂を目指すようになった。また、お山参詣の準備も簡略化されるようになり、お山参詣の準備である潔斎は、社会と文化の変貌により7日間を費やす余裕がなくなり、現在はほとんど行われていない。かつては、松明の明かりを頼りに駆け登ったが、昭和40年に津軽岩木スカイラインが建設され、観光バスが往復するようになった。さらに昭和42年に9合目まで続くリフトが完成され、9合目から頂上まで30分弱の時間で登れるようになった。いつでも誰でも登れるようになり他県からの登山者が増える一方で、神山として崇められ信仰の対象とされてきた岩木山は、観光の対象となっている。現在、麓から徒歩で向かう人は昔に比べ減少しているが、山頂から明けゆく自らの町を眺め、祈る人々の姿に変わりはないといえる。

このお山参詣は、すぐれた伝統行事として昭和59年1月21日、文部省告示第12号により、「岩木山の登拝行事」の名称で重要無形民俗文化財に指定されている。

農業の守護神として崇められてきた岩木山に登拝する団体は、かつては部落単位であったが、近年では、会社

の有志達の団体も多くなってきている。また、地元岩木町では町会（部落）ごとに参加していたが、過疎に伴う人口減、高齢化社会の進行、若者の減少により参加者は年々減少してきた。そこで、昭和60年から町主催（2年目より観光協会主催）による、誰でも参加できる「レッツウォークお山参詣」を始めた。岩木町内では現在この「レッツウォークお山参詣」のみが一般の人が参加する唯一の団体となっている。これは観光協会主催のいわゆる新しい形で再生されたイベントといえるような新しい祭りである。岩木町での参加団体は、この「レッツウォークお山参詣」と保育所、小学校の3つである。「レッツウォークお山参詣」の目的は誰でも気軽に参加出来るように、また県内外の人達に伝統行事を体験してもらうことである。

また「お山参詣保存会」が県内各地にあり、お山参詣の伝承に力を入れている。

お山参詣には、他地域の人々との交流と多世代の人達との交流による社会的効果、地域に伝わる歴史や文化を伝承していくという文化的効果、さらに地域によって限定されるが経済的効果が期待されていると言えよう。

時代の変貌とともに、今日ではいわゆる「イベント」の傾向が強くなってしまっているが、部落民が意気投合し、交流と相互扶助の効果を持っていると言われ、形式が変わっても岩木山を参拝する本質は昔と変わっていないといえる。

2) 「お山参詣」の現状

お山参詣の流れは前述で紹介したとおりであり、現在も昔とほとんど変わらない。

神社周辺には、他の集落の一行が集まり、通りに面した民家の居間で人々が休んでいる。神社の前の広場は、観光客や他の団体であふれている。本殿へ上がる前に、行列は輪になり囃子の音色とともに一層活気がでる。「奉納 岩木山神社」と書かれた大幟は、横にして6人ほど運んでいるが、所々で高々と掲げる姿がみられる。地元の人によると、「大幟を掲げるためには、呼吸を合わせなければならない」と話していた。男性は、幟の根元を腰のまわしに固定し、高々と掲げる。本殿に向かう際、参道の鳥居に数メートルもある幟をくぐらせなければならない。幟の先端を鳥居に引っ掛けないようにくぐらせるのだが、斜めになる幟を支えるには相当の力があるようだ。高々と掲げうまく鳥居を抜けると、盛大な歓声とともに大きな拍手があがる。

3) 「お山参詣」とお囃子

西角井（1985）は、「祭礼の風流については、山鉦・山車・楽車（または車楽）・屋台などと呼ばれるきらびやかなお練りの山車など造形風流というべき視聴的な要素に

多くの注意が注がれているが、音曲風流というべき視聴的な要素の祭礼囃子も大切な風流である」と述べている。

昼から続く囃子と踊りは、日が沈むにつれて一層盛んになり、境内には火が灯り、人の輪も大きく膨れあがる。神社に参詣参拝した人々は、自然と境内に集まり輪になり、囃子の笛、太鼓、鉦の音を夜な夜な響かせている。この日ばかりは神社周辺に住む人達は、どんなに騒いでもお山参詣だからという理由で大目にみている。地元の人によると「これが本当のお山参詣」だという。年に一度の部落交流の場であり、輪の中には誰でも参加でき、お囃子で往来する人達の話し声も殆ど途切れることはない。これは、お山参詣のパフォーマンスの一つとも言えよう。これらのことは、岩木町民や参拝者たちのお山参詣に対する愛着や誇りがあるからこそ生まれたものであり、その気持ちは代々受け継がれていると考えられる。

2. 主催者・地元高校と「お山参詣」

1) 岩木町・町観光協会

岩木町観光商工課、岩木町観光協会へのインタビューを通し、主催者としてのお山参詣の現状や課題等について話を伺った。

町民にとってお山参詣は生まれた頃からあり、なくてはならないものである。沿道では、手を振る幼児たち、お囃子を聞きながら涙を流すお年寄りの姿が見られる。温かい拍手を浴び、自然と参列者の笑顔がこぼれる。慰労会は、町内外の人達の交流の場であり、お囃子に合わせ、参拝者達は陽気に踊りだす。徐々に輪がひろがり参拝者の心が一つになる場である。

「レッツウォークお山参詣」に関しては、以前は町外にPRをしていたが、現在はそれを無くし、地元の人たちに自分たちの祭りとして自分たちで守っていこうという趣向に変えつつある。しかし、まちを挙げて盛り上げていこうという気運がまだ町民まで浸透されていない現状である。

また学校の行事として行われるようになり、子どもへのふるさと教育はしっかりできているが、大人へのふるさと教育は「お金を出してまで参加したくない」「めんどくさい」という声があり、大人への配慮も今後の課題とされている。

さらに参加者は年々減少しており、また、若い人はお山参詣への理解はあるが、参加は少ない状態であり、後継者づくりが大きな課題となっている。

2) 岩木山神社

以下の内容は、岩木山神社禰宜の須藤廣志氏のお山参詣に対する感想である。

青森県は現在3割が第1次産業で7割がサラリーマンという構成であり、様々な職種の人々が集まり、お山参詣に参加することで、各村々がまとまり帰属意識を高め

ることができる。生活様式が今と昔とでは変わってしまっているが、お山参詣は人々のコミュニケーションの場であることには変わりはないのである。

年に1度地域を挙げて祝うお山参詣の3日間は、町内だけではなく、県内外から祭りのために人々がやってくる。新しい参拝者が昔からある祭り、伝統的なものを自分たちの生活に取り組むことで仲間意識（同族意識）が生まれる。

お山参詣が今もなお続けられているのは、長い間の伝統と人々のお山参詣に対する愛情があり、そしてお山参詣保存会や町内会といった団体が形成されていることが大きな土台とまとめている。

3) 岩木高校

学校側は生徒のお山参詣参加に対し、「地域固有の伝統行事の体験と伝承を通して地域の理解、地域への愛着を深めること」、さらに「成就感を強く持たせ、自信をつけさせること」を目的としている。学校側が考える教育効果は次の通りである。

- ①意欲的な行動の育成
- ②責任感の育成
- ③感動と達成感を味わうことができる
- ④日常の生活空間と異なる場面で活動し、学習できる
- ⑤帰属意識の形成と人々との交流

地域の人にお囃子を習うことで、地域の人との交流が広がり、またお囃子の大人から子どもへの伝承によって地域に伝わる文化を守っている。

伝統行事であるお山参詣を学校教育の一部として取り入れることで、地域のイメージアップに繋がるとともに、生徒のコミュニティ・アイデンティティの形成にも繋がらるだろう。

参加する生徒にはそれぞれ役割があり、お囃子、御幣、お供え物を持ち、約6キロの距離を約4時間かけて歩くのである。神社に到着したときの生徒の達成感にあふれた表情は生き生きしている。沢山の地域からの参詣団体の「トリ」を努めるのが、「岩木山のあるまち」岩木町の参加団体の一団である。囃し方の生徒達の半纏には校名が記され、学校の標旗を掲げる姿に、参拝者ならびに地元の人達から拍手や歓声があがる。生徒達はこれらの励ましによって心を動かされているのである。

今後の課題として、現在岩木高等学校のお山参詣は、「レッツウォークお山参詣」にすべて依存しているが、岩木高校独自のお山参詣を造ることで準備段階から経験ができるため、より大きな効果が得られると考えている。お山参詣を造り伝承していくという意味の醸成と積極的な行動が必要になってくる。しかし、「レッツウォークお山参詣」が岩木町の主催ではなく、岩木町観光協会の主催であることからわかるように、お山参詣そのものには民俗的・伝統的行事とはいっても、宗教的な要素は否

めない。宗教行事と捉える人がおり、学校が宗教行事に生徒を強制的に参加させるというのは問題であると考えられ、教育効果とは別の次元で考慮しなければならないことである。岩木小学校では、宗教問題が発生し、学校ではなくPTAの主催で行い、全校生徒ではなく6年生のみの参加としている。しかし、学校行事としてでも参加しなければ、地域への誇りなどの思いを感じることはできないのではないだろうか。

3. 「お山参詣」参加者の実態と意識

1) 参加者の属性

お山参詣の参加者に対し、個別面接調査法による調査を行った。調査対象者137名の個人的属性は表1の通りである。

表1. 参加者の属性

	属性	人数(人)	
性別	男性	63	46.0%
	女性	74	54.0%
年齢層	30歳代未満	39	28.5%
	40～50歳代	49	35.8%
	60歳代以上	49	35.8%
居住地	岩木町内	40	29.4%
	青森県内	68	50.0%
	県外	28	20.6%
参加回数	初めて	40	29.4%
	2～5回未満	34	25.0%
	5～10回未満	31	22.8%
	10回以上	31	22.8%

2) 参加者の参加動機

参加動機については、性別、年齢別では差がみられなかったが、居住地別にみると大きな違いがみられた。

全体的に「興味・関心があるから」(61.0%)「家族や所属団体の仲間との親睦のため」(44.9%)「家内安全・五穀豊穡祈願のため」(42.6%)の3項目が高い動機となっている。

岩木町内、青森県内の参加者は「家内安全・五穀豊穡祈願のため」といったお山参詣本来の意味に沿って参加している。そして、「家族や所属団体の仲間との親睦のため」「地元の人や他団体との交流のため」といった社会的効果を求めて参加をしている人も多くみられた。そして、全体的に複数の参加動機を持つ人が多かった。一方、県外の方は、お山参詣の本来の意味に沿った動機よりも「興味・関心があるから」(78.6%)「旅行・観光を兼ねて」(10.7%)という動機が他の2群に比べ多くみられた。また「その他」の意見で、「伝統的な行事を体験したい」という動機も多くみられた。

3) 参加者の評価

参加者に対し「お山参詣」への評価を、「気晴らしやストレス発散」「家族や仲間との親睦」「地元の人や他団体との交流」「達成感や充実感」「全体の満足度」の5項目

から行った。「満足」を5点、「やや満足」を4点、「どちらともいえない」を3点、「やや不満」を2点、「不満」を1点に得点化し、平均値で比較を行った。

全体的に「お山参詣」への評価は高い。性別では、5項目中4項目で女性の評価が低いものの統計的には差はみられなかった。

居住地別にみると、「家族や仲間との親睦」「地元の人や他団体との交流」については、青森県内や町内の人達の満足度は高く、県外の人達は中程度の満足度であり、統計的にも1%レベルで有意な差がみられた。県外の人々の評価がいずれの項目とも他に比べ低くなっていることが分かった。

表2. 居住地別にみる「お山参詣」の評価

	気晴らしやストレス発散	家族や仲間との親睦	地元の人や他団体との交流	達成感や充実感	全体の満足度
岩木町内	平均 4.50 標準偏差 0.749	4.68 0.589	4.50 0.788	4.58 0.765	4.53 0.879
青森県内	平均 4.53 標準偏差 0.700	4.62 0.607	** 4.40 0.799	** 4.62 0.711	4.59 0.716
県外	平均 4.19 標準偏差 0.939	4.29 0.751	4.04 0.889	4.50 0.745	4.52 0.643
全体	平均 4.45 標準偏差 0.776	4.57 0.643	4.36 0.825	4.58 0.729	4.56 0.742

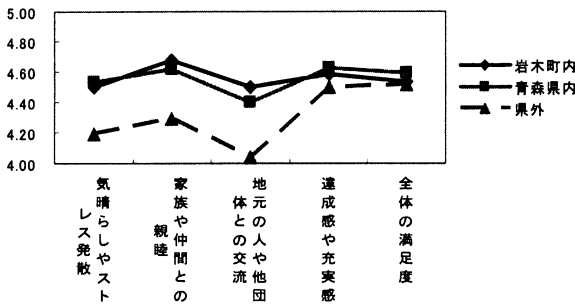


図1. 居住地別にみる「お山参詣」の評価

4) 今後の参加意向

今後の参加意向については、全体では77.2%が今後とも参加する意向を示し、いいえは若干名となっている。

表3. 居住地別でみる今後の参加意向

	はい	いいえ	わからない	総計
岩木町内	27 67.5%	3 7.5%	10 25.0%	40 100.0%
青森県内	57 83.8%	3 4.4%	8 11.8%	68 100.0%
県外	21 75.0%	0 0.0%	7 25.0%	28 100.0%
計	105 77.2%	6 4.4%	25 18.4%	136 100.0%

$\chi^2=6.231$ N.S

3. 高校生の実態と意識

1) 高校生の属性

1年生全員103名と2,3年生の参加者27名に調査

を行った。自主的な参加者である2,3年生は圧倒的に女子が多い。

居住地別にみると、1年生の約80%が町外であり、圧倒的に町外者が多いが、2,3年生に関しては約半数ずつとなっている。

表4. 高校生の属性

	男	女	町内	町外	全体
1年生	51 49.5%	52 50.5%	20 19.4%	83 80.6%	103 100.0%
2,3年生	5 18.5%	22 81.5%	15 55.6%	12 44.4%	27 100.0%
総計	56 43.1%	74 56.9%	35 26.9%	95 73.1%	130 100.0%

2) 「お山参詣」の評価

生徒に対しお山参詣への評価を、「気晴らしやストレス解消になった」「友達との親睦が深まった」「達成感や充実感を感じた」「感動した」「退屈だった」「苦痛だった」の6項目で調べた。「非常にあてはまる」を5点、「あてはまる」を4点、「どちらともいえない」を3点、「あまりあてはまらない」を2点、「全くあてはまらない」を1点に得点化し、平均値で比較を行った。

全体的には、「達成感や充実感を感じた」「友達との親睦が深まった」の項目で高い評価をしている。

学年別ではほとんどの項目で大きな差がみられ、いずれも2,3年生が高く評価し、これは自主的な参加の結果といえよう。特に「退屈だった」「苦痛だった」というマイナス評価の項目では極めて大きな差がみられた。

表5. 学年別にみる「お山参詣」の評価

	※1	2	3	4	5	6
1年生	平均 3.31 標準偏差 1.011	3.67 1.025	4.13 1.045	3.36 0.891	3.31 1.178	3.04 1.029
2,3年生	平均 3.89 標準偏差 0.847	4.30 0.912	4.41 0.747	4.04 0.980	2.41 1.152	1.96 0.980
全体	平均 3.45 標準偏差 1.001	3.83 1.030	4.20 0.984	3.53 0.955	3.09 1.231	2.77 1.114

※1. 気晴らしやストレス解消になった 2. 友達との親睦が深まった
3. 達成感や充実感を感じた 4. 感動した 5. 苦痛だった
6. 退屈だった

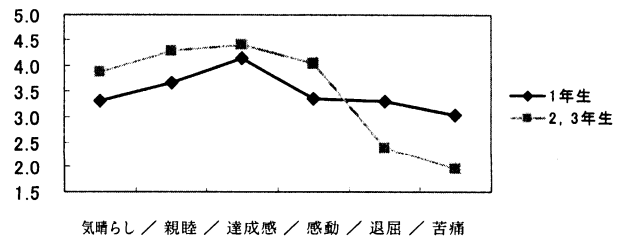


図2. 学年別でみる「お山参詣」の評価

3) 今後の参加意向とその理由

今後の参加意向については、2、3年生は今後も参加する意向を示しているが、1年生の6割が参加したくないと回答している。

2、3年生の理由として「楽しいから」(80.0%)、「お祭りが好きだから」(68.0%)、「お囃子が好きだから」(60.0%)という理由が高くなっており、1年生は「楽しいから」(46.7%)「岩木町の伝統行事だから」(37.8%)「お祭りが好きだから」(31.1%)という理由が上位であった。2、3年生は回答数も多く、より積極的な態度を読みとることができる。

参加したくないと回答した生徒にその理由を記述してもらった。ほとんどの生徒が「疲れたから」「だるいから」という理由が圧倒的に多かった。

表6. 学年別でみる今後の参加意向

	参加したい	参加したくない	総計
1年生	41 39.8%	62 60.2%	103 100.0%
2, 3年生	25 92.6%	2 7.4%	27 100.0%
計	66 50.8%	64 49.2%	130 100.0%

$$\chi^2=23.85 \quad P<0.001$$

V. 考察

一般参加者の意識調査により、町の意図通り、お山参詣参加者に社会的・文化的効果をもたらしていることが明らかとなった。すなわち、一般参加者の岩木町内、青森県内の参加者は、「興味関心があるから」「家内安全・五穀豊穡祈願」のほか「家族や所属団体の人との親睦」や「地元の人や他団体との交流のため」に参加し、後者の2つの目的の評価(満足度)も非常に高いことから社会的効果をあげていることがわかる。また県外参加者の参加動機は「興味関心があるから」が最も多く、また「その他」の動機で、地域の伝統や文化を学ぶために参加している人も多く、伝統的な文化の伝承や学習という文化的効果もあげているといえよう。これらの効果や機能をよりいっそう高めるためには、町のPRを含めて始めた「レッツウォークお山参詣」に、さらに多くの町内および町外の人達を巻き込み、またリピーターとなるような工夫や仕掛けが必要であると考えられる。そして、若い世代の人達のリピーターをいかに増やしていくかといった課題があげられる。

岩木町全体がこのようなお山参詣によって、特に町民の生活満足度を向上させ、地域社会形成へと導くためにはより多くの町民の参加やサポート等が必要となる。岩木山神社周辺以外の多くの町民が祭りに対し様々な関与する方法を、今後、町は模索する必要がある。

学校側のインタビューを行った結果、先生方のお山参詣に対する思い入れは強く、生徒たちに岩木町の伝統行事を知ってもらい、帰属意識を高めようと必死である。一方で、生徒へのアンケート結果から生徒達のお山参詣に対する思いは先生方ほど燃えず、特に1年生では「退屈だった」や「苦痛だった」の意見も多く、6割が今後参加したくないと回答している。生徒の多くはお山参詣に参加したことにより達成感や充実感を感じたとしても、特に多くの1年生が「もう一度参加したい」という気持ちになるまでには、至っていないようである。

2、3年生はお山参詣に対する愛着が強く、リピーターになることによってまちへの愛着も強くなることが示唆された。ふるさと教育という学校側の趣旨を活かすためには、1年生への配慮という問題が指摘されるといえる。

学校側と生徒の感じ方に差がみられたが、地域独自の行事に参加することは、他には代えられないものである。ある卒業生は、地域を離れた時に初めてお山参詣の意味を知る事ができたと話している。自己のアイデンティティを養うことを目的としたお山参詣に対する学校側の願いが、時間はかかりながらも、生徒に届いているといえる。

このように、地域の祭りに参加することや地域文化の伝承には様々な効果が得られ、教育にとって極めて重要であることがわかる。しかし、ここでも前述の町同様、祭礼すなわち宗教的儀式でもあるお山参詣を学校行事として取り入れることに対する賛否がある。今後もお山参詣を続けるために、課題を明らかにし解決していくことが今後必要になってくる。

お山参詣が、今後、地域の活性化にますます貢献する手法として、以下の3点が重要な示唆を与えてくれると考える。

(1) 機能集団の育成とその「場」の保障

(2) 3つのジバ

(3) 「交流」(地域内、他地域、多世代、異業種)

(1)に関し、米沢(2002)は「地域づくりを長続きさせ、根づかせるためには、機能集団の育成とその活動の「場」の保障が不可欠である」と述べている。また、「行政(首長)主導」→「機能小集団」の育成→内発的活性化の促進、というパターンのモデルを提唱している。

観光協会、商工課、岩木山神社、集落単位の保存会といった機能集団、そして活躍の場であるお山参詣という「場」がある。人々にとって、地域の祭りは結束の場であり、コミュニケーションの場である。今後も学校教育や生涯学習、福祉など様々な分野で機能集団を育成し、感動や充実感を呼ぶその活動の場を保障することによって、まちは内発的活性化を促進することができるであろう。

(2) については、菊地 (2004) の指摘する3つの「ジバ」をお山参詣にあてはめると、岩木山や岩木町という「地場」、そこにお山参詣という「磁場」があり、町民、参拝者、また地域を離れた人々が自分の居場所を求めてやって来る。そして、自分の場と故郷を確認する「自場」となるのである。この図式からも、「自場」というコミュニティ・アイデンティティ形成には魅力ある「磁場」の重要性が指摘されよう。歴史的に受け継がれたものを土台とし、新たな魅力ある祭りを創造しなければならない。

(3) については、現在もお山参詣には多世代の人が参加しており、囃子方も同様に多世代にわたり演じている。祭りを通して、家族や仲間との親睦や他団体の人、また学校と地域との交流が深まり、コミュニティ・アイデンティティも同時に高められているのである。

また祭りを継続するためには、リピーターの確保は欠かせない。しかし、リピーターの確保はもちろんのことそれだけに留まらず、新しい住民の参加も求められていると考える。

今後求められる仕掛けとして、町や主催者は、来街者を単なる観光客や消費者（コンシューマー）として扱うのではなく、祭りへの参加など生産者（プロデューサー）として体験させ、そこに付加価値を生み出す仕掛けが必要である。このようにプロシューマー（プロデューサーとコンシューマーが融合化した社会的存在）として参加することで、町内外の人々に様々な効果が得られ、マインドシェアを高め、地域の活性化に寄与するのである。

阿久津 (2003) は「都市化において血縁・地縁・社縁という『選べない縁』の原理による集団の帰属意識というものは衰退しつつある。しかし『選べる縁』は、共通の関心や目的を持った人々が、特定の時間と空間のなかで、特定の生活様式を持って『場』を形成する事が一般的である」と述べている。また、「最近の祭りは『選べる縁』により、アイデンティティの獲得という機能を果たすことで、『選べない縁』から『選べる縁』へと铸直す契機となっている」と述べている。

従来、お山参詣は「町内（部落）」という地縁集団を基盤として参加していたのに対し、現在参加している団体のほとんどが、各地区の「お山参詣愛好会」「登山囃子保存会」「勤め先の会社の団体」「学校」などといった「地縁集団」以外にも、「社縁」「学縁」の集団が組織されるようになった。「レッツウォークお山参詣」という全く新しい「関心縁」とも言うべき参拝団体も組織された。このように伝統的な祭りも、過疎化や「縁」の変化の中で、変容を余儀なくされている。

岩木町は平成18年2月に弘前市と合併し、お山参詣も新たな局面を迎える。新弘前市の中で伝統的地域社会行事として、今後もお山参詣がしっかりと根つき、また期待される地域社会形成機能を果たすことが望まれよう。

VI. まとめと今後の課題

本研究の目的は、伝統的な祭りであるお山参詣が地域活性化にどの程度貢献しているのか、またお山参詣が、どのように岩木町や津軽地方に望ましい地域社会形成機能を果たしているのかを明らかにしていくことであった。今回の調査から、歴史や文化をただ伝承するだけでなく、地域の生活をめぐる社会変化に対応させながら、自らのアイデンティティの基盤としてお山参詣を捉えようとする人々の意識が存在していることが分かった。各地域にある「お山参詣保存会」支部など、町全体で伝統を保持する組織を構成し、時代の変化に対応しながら持続的で継続的な地域社会形成の土台として、お山参詣を位置づけているのである。

お山参詣は、現在、かつてのような閉鎖的・宗教的な祭りから、誰でも参加できるような地域の伝統的な行事となり、祭りを行う目的もその伝統性を残しつつ新しいプログラムを加えるなど、祭りが地域の活性化手段として位置づけられている。

他地域の人々との交流と多世代の人達との交流による社会的効果、地域に伝わる歴史や文化を伝承していく文化的効果といった様々な効果が得られていた。しかし考察で指摘した通り、多くの課題も存在している。それらの課題、特に無関心層への配慮や多くの町民を祭りに関与させるという課題の解決が是非とも必要と考える。

地域住民が一体となって取り組み、参加することで得られた達成感や充実感により、地域住民は自分の住むまちに愛着や誇りを持ち帰属意識を高める。地域や町を元気にしてくれる祭りに積極的に参加することは、主体的なまちづくりへと発展し、自分自身の再生とともに町が生き返る可能性を秘めているのである。

今回の調査では、参加者と主催者に対する調査を行った。今後の課題として、祭りの華やかさだけではなく、祭りの前後の活動や現在まで受け継がれた背景や経緯から、参加者と主催者に加え、祭りを見る人や一般町民の祭りに対する意識調査を継続的にを行い、さらに次世代へ受け継ぐために常に地域の課題に目を向けたいと思う。

引用・参考文献

- 1) 阿久津昌三 (2003) 都市空間と祭祀空間, 藤田弘夫・吉原直樹, 都市社会学: 157 - 175, 有斐閣.
- 2) 太宰治 (1951) 津軽, 新潮社.
- 3) 池上航志 (2004) 山間地域における公共施設づくりと地域活性化に関する研究—山形県小国町の事例—, 仙台大学大学院スポーツ科学研究科研究論文集 vol.5: 1 - 8.
- 4) 色川大吉 (1979) 日本民俗文化大系 (1) 柳田國男, 講談社.
- 5) 岩木高校記念誌 (1998) 35 - 41.

- 6) 岩木町教育委員会 (2005) 岩木町の教育.
- 7) 岩木町登山はやし保存会 (2004) 岩木町登山はやし保存会 20 周年記念誌.
- 8) 菊地昭典 (2004) ヒトを呼ぶ市民の祭運営術, 学陽書房.
- 9) 津軽学 1 号 (2005) 津軽に学ぶ会.
- 10) 地域コミュニティづくり研究会 (2004) 自立型地域コミュニティへの道—人口減少に負けない豊かで元気な地域をつくる—, ぎょうせい.
- 11) 倉林正次 (1975) 祭りの構造—饗宴と神事—, 日本放送出版協会.
- 12) 倉沢進 (1998) コミュニティ論, 財団法人放送大学教育振興会, 放送大学教育振興会.
- 13) 倉沢進編者 (2002) コミュニティ論—地域社会と住民活動—, 財団法人放送大学教育振興会.
- 14) 陸奥新報 (2004) 9 月 14 日付.
- 15) 月刊 あおもり草子 (1996) vol.98 : 1 - 10.
- 16) 西角井正大 (1985) 祭礼と風流, 岩崎美術社.
- 17) 週刊「神社紀行」第 38 回配本 岩木山神社 (2003), 学習研究社.
- 18) 岡崎友典 (2004) 改訂版 家庭・学校と地域社会—地域教育社会学—, 財団法人放送大学教育振興会.
- 19) 須藤廣志編者 (2003) お山—平成 15 年歳末号 (第 30 号)—, 青森県中津軽群岩木町大字百沢岩木山神社お山編集室.
- 20) 須藤茂弘 (1980) 月刊岩木 お山参詣—岩木山信仰の心—, vol.357 : 1 - 2.
- 21) 田村明 (2004) まちづくりの実践, 岩波書店.
- 22) 東奥日報 (2004) 9 月 14 日.
- 23) 松平誠 (1980) 祭の社会学, 講談社.
- 24) 丸山富雄編者 (2000) スポーツ社会学ノート 現代スポーツ論, 中央法規出版.
- 25) 丸山富雄・池上航志 (2003) 山形県小国町の地域づくりと高橋睦美の地域政策観, 仙台大学紀要 34 - 2 : 10 - 23.
- 26) 丸山富雄・吉田智美 (2005) 秋田県琴丘町のスポーツ・文化振興による地域活性化策に関する研究, 仙台大学紀要 37 - 1 : 1 - 12.
- 27) 須田直之 (1998) スポーツによる町おこし—その社会学的基礎—. 北の街社.
- 28) 山口泰雄 (1996) 生涯スポーツとイベントの社会学—スポーツによるまちづくり—, 創文企画.
- 29) 柳田國男 (1969) 定本柳田國男第 16 卷, 筑摩書房.
- 30) 米沢和彦 (2002) 地方自治体行政と地域活性化, 鈴木広ほか監修, 地域社会学の現在, ミネルヴァ書房.
- 31) 脇本昌樹 (2004) ワールドカップサッカー開催競技場の社会的機能に関する研究, 仙台大学大学院スポーツ科学研究科研究論文集 vol.5 : 37 - 44.